

愛知教育大学

未来共創プラン

2024

未来の教育を共に創る



国立大学法人
愛知教育大学
AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

創基 150 周年を迎え、 新しい形の教員養成に挑戦し 教職の魅力を高め、 未来につなぐ！

自然領域：創作和菓子コースによる第6回「あつまれ！子どもキャンパス」の様子

「地域協働教育体験活動」という挑戦

「地域協働教育体験活動」は、本学が2022年に新設した科目で、学生が地域と連携し、自らの教育体験を子どもたちにどう還元できるか探究的に学ぶことで、教職及び教育を支える専門職に必要な資質や能力を養うことを目的としています。

2024年度は23のコースが開講され、488名の学生が履修しました。

学生だけでなく、参加した子どもたちも楽しい「遊び」や「学び」を体験することで、「教える」ことに関心を向け、教職の魅力向上、将来の教員不足の解消につながることが期待されています。

また、地域は、自らの抱える諸課題について大学と改善・解決に向けたアクションを起こすことで、共に地域社会や地域の教育を創っていくことが期待されています。

社会領域

シーホース三河コース



プロスポーツチームの地域における役割を学び、地域貢献活動イベントの企画・運営を実践します。

イベント後には参加者アンケートなどを用いて、「Good」「Check」「Next」の視点で振り返りを行います。



シーホース三河株式会社
チーム運営グループ
アカデミーチーム
大西啓介氏

私たちのアカデミー事業の業務を実際に体験しながら「仕事の進め方」を皆さんと共に学んでいます。

バスケットボールクリニックをはじめとしたイベント運営時の企画・運営方法、考え方等をレクチャーしました。

また、ホームゲーム観戦や興行見学を通じて、バスケットボールを主体としたアリーナエンターテインメントを体感してもらいます。

©SeaHorses MIKAWA co.,LTD.

社会領域

豊田市国際交流協会コース



「若者の国際フォーラム in とよた」の企画・運営を軸として、その準備のための学習・体験を通じて、海外につながるのある子どもたちやそこに関わる周囲（先生や保護者、学校など）を取り巻く課題について考えます。

1 年次に本学の土曜親子日本語教室のボランティアに参加して、もっと詳しく知りたいと思い、このコースを受講しました。

保見団地で生活する子どもたちの様子を見たり、地域をより良くしようと活動している NPO 団体と関わることで、1つの問題でもアプローチの仕方は沢山あり、自分に今できることはなんだろうと考えて 1 歩ずつでも進むことの大切さを感じました。



義務教育専攻
学校教育科学専修 3 年
佐々木惟さん

創作和菓子コース



「子どもに和菓子を」をコンセプトに岡崎市で 100 年以上続く和菓子店と連携しながら、日本の和菓子文化について学びを深めるとともに、本学の自然観察実習園で栽培・収穫したもち米を生かした和菓子を考案し、子どもたちと地域の和菓子文化を創り出します。



小野玉川堂 店主
小野悟氏

和菓子の歴史や季節の和菓子、私たちの和菓子作りの特徴や子どもたちに和菓子を広める取組を紹介しています。学生が、好きな和菓子について発表するのを聞くと、和菓子愛を感じて、とても嬉しいです。イベントでは、学生が、丁寧にわかりやすく教えているので、子どもたちは真剣におはぎづくりに挑戦しています。大学生にも、子どもたちにも、和菓子のすばらしさを伝えることができ、とても誇らしいです。

歴史文化コース



1969 年、本学が刈谷市井ヶ谷町に建設された際に発見されたのが松根第 3 号窯です。本コースでは松根第 3 号窯の保存活用方法について課題を設定し、地域の博物館等と連携しながら、猿投古窯跡群について学びを深め、学んだ成果を子どもたちに還元します。

専修での学びを活用できればと思い、このコースを受講しました。イベントでは日本史の知識と、遺跡や博物館で実際に目にして学んだことを結び付け、子どもたちが興味を持ってくれるような説明を心掛けました。知識を実践に反映したり、子どもと接したりする上での配慮や工夫を学べたことで、自信を持って教育実習を迎えられました。



高等学校教育専攻
地歴・公民専修
菅沼来樹さん

その他の「地域協働教育体験活動」

- (社会領域)
- 中部電力コース
 - 富士松スポーツクラブキッズ教室コース
 - 子どもの運動遊び・スポーツコース
 - セリオコース (前半)
 - セリオコース (後半)
 - FC 刈谷コース

- (自然領域)
- みよしコース
 - 地域の自然刈谷コース
 - 井ヶ谷コース
 - 自然と共生コース
 - レクリエーションコース

- (多文化領域)
- カンボジアコース
 - インドネシアコース
 - タイコース
 - ベトナムコース
 - モンゴルコース
 - 韓国 (光州) コース
 - 台湾コース、マレーシアコース

学長謝辞及び今後の抱負

本学は 2023 年に、前身である 1873 年創立の「愛知県養成学校」から数え創基 150 周年を迎え、記念式典を 11 月 19 日 (日) に講堂にて開催しました。私は、式辞の結びで「多様な立場の人々と連携・協働する新たな体験活動をカリキュラムに位置付けることで、多様な教師集団をコーディネートできる力を有した教員を養成する」、「大学と附属、地域社会の皆様と協働し、『創基 150 周年を迎え、新しい形の教員養成に挑戦し教職の魅力を高め、未来につなぐ!』を新たなコンセプトとして、一丸となって使命を果たしていきたい」と述べました。2024 年度は、その一歩を踏み出すことができたと感じています。

学長 野田敦敬



写真：附属名古屋小学校受け入れ時より



愛知教育大学 未来共創プラン

未来の教育を共に創る



そもそも

「愛知教育大学未来共創プラン」

て、なんだニャ？何をするのかニャ？

びしょでがくちょうせんせい〜



本学のキャッチフレーズとして、「**子どもの声が聞こえるキャンパス**」、「**地域から頼られる大学**」を掲げ、そこに謳う理想の姿を実現すべく、「愛知教育大学中長期ビジョン・目標・戦略」に「**共に未来の教育を創る**」という思いを込め 2021 年 3 月に策定されたものだよ！

●「愛知教育大学未来共創プラン」のビジョン

「愛知教育大学は、
子どもと共に、
学生と共に、
社会と共に、
附属学校園と共に、
未来の教育を創ります。」

『未来の教育』を考える上では、これからの未来を担う子どもたちをはじめとした様々なステークホルダーの声を受けとめ、開かれた大学として共に前進していくことが不可欠であると考え、ビジョンにその方向性を位置づけました。

このビジョンは

1. 子どもを大切にする
2. 学生を主体的な存在として尊重する
3. 地域社会、学校、教育委員会とのつながりを大切にする
4. 附属学校園との連携を一層強化する
5. 共によりよい教育を創る

という5つの視点から成ります。



●3つの目標と9つの戦略

「愛知教育大学未来共創プラン」のビジョンの実現に向けて、重点的に取り組む道筋を3つの目標として掲げ、目標を達成するために具体的な行動の方針として9つの戦略を立てました。



目標 1

子どもや学生、社会との対話や協働を通して、現代的教育課題の解決に貢献し、より質の高い教員及び教育支援専門職の養成を実現します。

戦略1 大学及びその周辺地域を「学び」と「遊び」を一体化できるエリアとして、実践フィールドと実践プログラムを提供します。

(子どもキャンパスプロジェクト) …5P

戦略2 教育リソースデータバンクを設置し、教育現場の問題解決に貢献する教育のプラットフォームを構築します。

(教育のプラットフォーム構築プロジェクト) …13P

戦略3 よりよい教育の未来につながる教職の魅力を共に創り出し、発信します。

(教職の魅力共創プロジェクト) …15P

戦略4 協定校を始めとする海外の教育機関との連携を密にして、グローバル化に対応したプログラムを学部と大学院で整備します。

(グローバル化推進プロジェクト) …19P



目標 2

大学と附属学校園との連携強化を図ることで、より質の高い教員研修を実現します。

戦略5 附属学校園と教職大学院との連携を強化し、教育の実践的研究拠点を構築します。

(共創的探究活動指導力育成プロジェクト) …21P

戦略6 教育委員会や教育現場等との緊密な連携を通して、附属学校園が今後の公立学校等のモデルとなる実証研究に取り組みます。

(大学・附属学校園連携推進プロジェクト) …23P



目標 3

広域拠点型教員養成系大学としての意義と価値を高めます。

戦略7 教科等横断し、協働的に学び合う次世代型プログラムを開発するとともに、教育効果を客観的に検証する評価システムを構築し、学生の資質向上や大学の授業改善につなげます。

(教科横断探究プロジェクト) …25P

戦略8 IR 部門を活用して得られた学内外の客観的なデータに基づき、戦略的な大学運営を行うとともに、教職員が協働して柔軟な組織運営を行います。

(IR 部門・教職学協働プロジェクト) …27P

戦略9 国公立大学と連携協定を締結して、教職大学院を核としたネットワークを構築します。

(大学間ネットワークの構築) …29P





子どもキャンパスプロジェクト

大学及びその周辺地域を「学び」と「遊び」を一体化できるエリアとして、実践フィールドと実践プログラムを提供します。

- 「学び」と「遊び」が一体化したエリアへと転換する。
- 学生・教職員・地域の協働で多様な興味関心を広げる機会を増やす。
- 遠足や校外学習等の新たな目的地としての提案をする。
- 大学に自生している竹を使ったアクティビティーの創出と関連した体験的な教科学習を行う。
- 大学のリソースの再発見と有効活用、課題解決を推進する。

プロジェクトメンバー

真島 聖子 小塚 良孝 稲垣 匡人 樋口 一成 縄田 亮太 成瀬 麻美 西野 雄一郎 西村 三郎 前原 義久 樋口 眞二
伊藤 実彩 大森 智子

学びと遊びが一体化したエリアへの転換

第5回「あつまれ！子どもキャンパス」を開催しました

8月10日（土）、第5回「あつまれ！子どもキャンパス」を開催しました。小学生 255 人と大学から 216 人（学生・附属高校生合わせて 197 人と教職員 19 人）の計 471 人（保護者の方を除く）が参加しました。

5 回目の実施となる今回は午前の部、午後の部、午前・午後の部の 3 つに分け、計 15 プログラムを実施しました。また、今回は初めて幼児も参加できるプログラムを用意しました。

参加した子どもたちからは「災害の時でもおいしいご飯が食べられることが分かってこのパッキングのレシピをいろいろ家で作ってみたいです！」（キミも防災マスター～ Let's パッキング～）、「家ではあまりできない染め物をできたからよかった。お姉さんがわからないことを教えてくれたから

楽しかった」（作って遊ぶ！レクリエーション ～好きがいっぱい・カラフル体験～）、参加した幼児の保護者からは「たくさん聞けて満足そうでした。まだいいの？と何度も聞いてきました」（よみっこ夏まつり！読み聞かせで楽しもう！！）などの感想が寄せられました。

また、プログラムを実施した学生や教職員からは、「去年出会った子どもと今年も再会することができ、またこのような出会いで子どもたちの成長を感じる瞬間に立ち会っていたと思った」「子どもたちとの接し方だけでなく、企画運営能力や参加者視点で考えることなど、さまざまな社会性を身に付けられた機会となっていた」などの感想が上がりました。

【午前の部】

- (1) 大学生とミニ運動会！ with ドッジボール
- (2) キミも防災マスター～ Let's パッキング～
- (3) ひとりできるもん！ Sewing 編
- (4) 竹船を作って・浮かべて・動かそう！！
- (5) フィルムで体験「ココロを保存」
- (6) ゲームでゴーゴー！算数クラブ☆
- (7) めざせ運動マスター！
一走り方、跳び方、投げ方を教えますー
- (8) わくわくシアター～創作ミュージカル公演！！

【午後の部】

- (9) 動いて遊ぶ！レクリエーション
～笑顔いっぱい・リフレッシュ体験～
- (10) ひとりできるもん！ Cooking 編
- (11) 作って遊ぶ！レクリエーション
～好きがいっぱい・カラフル体験～
- (12) 楽しもう！日本の伝統遊び体験
- (13) 大学のふしぎ発見！鎌倉時代の遺跡をさがせ！
- (14) 宇宙を体感！一望遠鏡で星空観測！3D メガネで宇宙旅行！ー

【午前・午後の部】

- (15) よみっこ夏まつり！読み聞かせで楽しもう！！



見て！見て！竹船が浮かんだよ！
（竹船を作って・浮かべて・動かそう！！）



これで星が見えるかな？
（宇宙を体感！一望遠鏡で星空観測！3D メガネで宇宙旅行！ー）



第6回「あつまれ！子どもキャンパス」を開催しました

11月23日（土・祝）、第6回「あつまれ！子どもキャンパス」を本学で開催しました。小学生459人と幼児88人、大学・附属高等学校から381人（学生・生徒336人と教職員45人）、地域の高校から11人（生徒10人、教員1人）の計939人（保護者の方を除く）が参加しました。

6回目の実施となる今回は、午前の部／午後の部／一日通しの部／出入り自由の部に分け、計32プログラムを実施しました。

【午前の部】

- (1) 高校生と遊ぼう！みんなが主役サッカー大会！
- (2) 竹林×のこぎりギコギコ×なたトントン
+組立+ゲーム=楽しい！
- (3) はじめてのソフトテニス in あいちきょういくだいがく
- (4) あつまれ愛教スポーツの森
- (5) リズムに乗って楽しく体を動かそう！
- (6) ひとりのできるもん！ Card Games 編
- (7) レーザー加工機とプラスチックを使って
オリジナルパズルを作ろう！
- (8) フィルムで体験「ココロを保存」
- (9) 愛教大・洲原池で、野鳥を探そう！
- (10) 車型ロボット mBot で自動運転の秘密を見つけよう！
- (11) 愛教大の馬に乗ってみよう！～馬とのふれあいイベント～
- (12) 大学に生えている竹でおもちゃや道具を作ろう！
- (13) オリジナルおはぎを作ろう！

【午後の部】

- (14) 高校生と学ぼう！いのちを守る防災教室！
- (15) 高校生と遊ぼう！笑顔！元気！バルシューレ＆ポッチャ体験
- (16) めざせ運動マスター！一走り方、跳び方、投げ方を教えますー
- (17) 今日から君もこども救命士！
- (18) 大学生とミニ運動会！ with ドッジボール
- (19) 電動車いすサッカーってなあに？
- (20) わくわくシアター～創作ミュージカル公演！！
- (21) ひとりのできるもん！ Cooking 編
- (22) ひとりのできるもん！ Sewing 編
- (23) 竹でスマホスタンドを作ろう！！
- (24) micro:bit の無線通信で遊ぼう！
- (25) エンジョイ・ザ・ワールド！～あの国この国どんな国？～
- (26) マイクラで大きな建築物をつくろう
- (27) ミツパチと遊ぼう学ぼう！未来の自然と笑顔のために！
- (28) 竹チップでカブトムシを育てよう！～冬の幼虫探し～
- (29) オリジナルおはぎを作ろう！

【1日通しの部／出入り自由のプログラム】

- (30) モンゴル体験！みんなでゲルを作ろう！
- (31) 自分だけのガラスプレートを作ろう！！
- (32) 読書の秋だ！よみっこ読み聞かせ祭！！

開催日当日は天まで抜けるような青空となり、黄色く染まったイチョウの葉が映える景色の中、元気いっぱいの子どもの声がキャンパス内に響き渡りました。

参加した子どもたちからは「自分でプログラムを作って、目的通りに mBot を動かすのが楽しかった」（車型ロボット mBot で自動運転の秘密を見つけよう！）、「作るのが苦手なぼくにも楽しめた」（大学に生えている竹でおもちゃや道具を作ろう！）、「トイレの水が流れないときは大変だと思った」（高校生と学ぼう！いのちを守る防災教室！）などの感想が寄せられました。

プログラムを実施した学生や教職員からは、「ただ子どもとかわるだけではなく、短い時間のなかでさまざまな学年の子どもと信頼を築き、共に活動に取り組むというのは、これまでにない新たな体験だと感じた」「参加してくれた子どもたちの笑顔、一生懸命子どもたちとかわる高校生の社会的態度形成、運営イベント当日指揮する大学生のリーダーシップこの3つの姿や成長を見られた。子どもキャンパスプロジェクトのあるべき姿だと感じた」などの感想があがりました。



マットの上で、輪をくぐって、障害物よけて...！
（あつまれ愛教スポーツの森）



もう少しでゲルの骨組みの完成だ！
（モンゴル体験！みんなでゲルを作ろう！）

「あつまれ！子どもキャンパス in 刈谷ハイウェイオアシス」を開催しました（予定）

2025年3月29日（土）、「あつまれ！子どもキャンパス in 刈谷ハイウェイオアシス」を刈谷ハイウェイオアシス株式会社と共催しました。

2023年12月に同社の役員が本学を訪問したことをきっかけに企画されたもので、大学及びその周辺地域で実践的な教育プログラムを提供する本学と、地域と密着して幅広い世代が楽しめる施設である同社が連携して、家族で外出することが多い春休みの週末に刈谷ハイウェイオアシス内で子ども向けイベントを実施することになりました。

当日は春らしい暖かな空気に包まれて、ピンク色に芽吹いたサクラの花びらが映える景色の中、教職員及び学生が企画した11個のプログラムと「愛教ちゃん」と「エディ」のキャラクター撮影会を実施しました。地元の子どものみだけでなく、高速道路を走行中の親子連れも休憩のついでに会場に響いていました。



イベントのチラシ



学生・教職員・地域の協働で多様な興味関心を広げる機会を増加

企業と協働で「第6回親子プログラミング教室－マイクラで大きな建物を作ろう－」を開催しました

5月18日（土）に豊田市のT-FACEで子どもキャンパスプロジェクトとして教職キャリアセンターの中池竜一准教授と学生ICT支援員4人が「第6回親子プログラミング教室－マイクラで大きな建物を作ろう－」を未来ラボステーションYY・丸善雄松堂（株）との共催で開催しました。



操作説明をする中池竜一准教授

で大きな建物を作ろう－」を未来ラボステーションYY・丸善雄松堂（株）との共催で開催しました。

午前中は小学1年生から3年生の親子10組が、午後は小学4年生から6年生の親子10組がマイクラについて説明



プログラミングをサポートする学生ICT支援員

を聞いた後、作品を作りました。

今回は、教育版マイクラフトを用いてプログラミングで大きな建物を作ることチャレンジしてもらいました。参加した親子20組は、壁を作るプログラムや床を作るプログラムを駆使して、相談しながらさま

まな建物を作り上げました。

プログラミングを駆使して自分だけのオリジナルの建物を作るという楽しい体験によって、プログラミングの楽しさと奥の深さを学ぶことができたと思います。

馬術部が「馬のえさやり＆蹄鉄（ていてつ）飾りつけ体験」を開催しました



にんじんおいしい？

馬術部では、主に子どもたちを対象とした馬との触れ合いや乗馬体験を定期的に開催しています。

今回は7月7日（日）に小学生を対象として学内にある厩舎と教育実験実習棟で「馬のえさやり＆蹄鉄（ていてつ）飾りつけ体験」を開催しました。

厳しい暑さでの子どもたちや馬の体調を考慮し、今回は乗馬体験の代わりに馬のえさやり体験と、馬のひづめに使われる蹄鉄で飾りつけ体験を行いました。またイベント当日が七夕ということで、子どもたちには学内でとれた笹に七夕飾りや願い事を書いてもらい

ました。

熱心に蹄鉄を飾りつける様子や、厩舎では、馬の大きさに驚きつつも笑顔で触れ合う様子が見られました。

私たちはこれからも、馬術の練習や大会への参加だけでなく、馬を通して生き物や馬術の魅力を伝え、地域と子どもたちの学びに貢献していきたいと思っています。



すてきなていてつにするんだ♪



この材料もおすすめだよ。

附属高等学校と協働で「AUE.A スポーツ教室」を開催しました

7月31日（水）、本学のプールで「AUE.A スポーツ教室」を開催しました。

「AUE.A スポーツ教室」は、小学生・高校生・大学生・教員と多世代の人たちがスポーツを通して交流することで、互いの学びを深めることを目的に活動しています。

今回は「高校生と学ぼう、水の事故から自分を守る方法を学ぼう」を実施しました。

まずは、本学の講義室で保健体育講座の村松愛梨奈助教から水の事故に関することや人間の体が水に浮く仕組み、海外での水泳の授業の様子などを座学やクイズ形式で楽しく学びました。

次に大学のプールに移動し、小学生と高校



クイズ形式での講義の様子

生・大学生が二人組のパディとなり、水の中での活動を行いました。

その後は、高校生が学校から持ってきたさまざまな物の浮力を使って体を浮かせる練習をしました。バランスが取りやすいものやバランスの取りにくいものの、試行錯誤しながら体を浮かせる方法を模索しました。

最後は、パディ同士で元気よく、安否確認の点呼を行いました。

小学生・高校生・大学生という幅広い世代が、ともに交流する中で水の事故から身を守る方法を学び、終始笑顔の絶えない素晴らしい取り組みとなりました。



高校生におんぶをしてもらう様子



ペットボトルを使って体を浮かせる練習

星城高等学校の1年生が本学の授業を見学・参加しました

12月10日（火）、星城高等学校の1年生76人と引率教員5人が大学見学のため本学を訪れました。2つのコースに分かれた生徒がそれぞれ2限と3限の計8つの授業を見学・参加しました。

生徒たちは大学に到着すると、本部棟第一会議室に集合し、広報課職員による全体説明を受けた後、2コースに分かれて行動しました。それぞれのコースでガイダンスや学食体験、施設見学などを行いながら、2限に開講されている「道德教育の理



ディスカッションって難しい！
（教育ガバナンス演習II）

論と方法」「初等体育科教育法A」「初等理科教育法A」および3限に開講されている「ものづくりリテラシー」「道德教育の理論と方法」「多文化リテラシー（日本語の語彙）」「ピアノ実習」「教育ガバナンス演習II」を見学・参加しました。大学生とディス



大学生のピアノ演奏を鑑賞する生徒
（ピアノ実習）

カッションをし、難しい講義を聴講するなど、実際に大学で行われている講義を体験する高校生にとっては、とても貴重な機会となりました。また実技を伴った講義では、大学生と一緒にダンスの動きをしたり、大学生のピアノ演奏を聴いたり、通常の大学見学では味わえない大学生との交

流を楽しみました。

授業に参加した生徒からは「授業の雰囲気がすごく良くて、自ら主体的に学びたいと思うような内容が展開されていた。」、引率した教員からは「高校に進学し1年も経っていない生徒たちが、大学進学についてより具体的なイメージを持つことができました。」などの声が寄せられました。

井ヶ谷幼稚園の園児がどんぐり拾いのため来訪しました

10月29日（火）、井ヶ谷幼稚園の園児によるどんぐり拾いを本学キャンパス内で実施し、井ヶ谷幼稚園の4歳児41人と5歳児45人、引率教諭12人、大学からは学生4人の合計106人が参加しました。

到着後、大きな声で野田敦敬学長にあいさつし、続いて学生たちにあいさつをしました。

その後4歳児と5歳児で別れてどんぐりや葉っぱなどを探し始めました。園児たちは傘の付いた大きなツヤツヤのどんぐりや小さな虫を見つけると、「先生！ いいのがあったー！」「かわいいダンゴムシがいたよー！」などと楽しそうに学生や引率教諭に報告していました。

ポケットにたくさんのどんぐりをしまい込み、ほくほく顔の園児たちは少し雨がぱらつく中、帰路につきました。

参加した園児からは「どんぐりたくさんひろった！」「またいきたいね」などの感想があり、また、井ヶ谷幼稚園の教諭からは「子どもたちは、いろいろな種類のどんぐりがあることを発見できました」「自分たちで拾ったどんぐりをすぐに遊びに取り入れて、よい経験ができました」というお言葉をいただきました。



ねえ、このはっぱってさあ
うんうん



学長先生、このどんぐり割れちゃって
るからあげるね！

富士松北小学校の2年生が来訪しました

2月14日（金）、刈谷市立富士松北小学校の生活科授業「町探検」の一環として、本学キャンパス内に設置したスタンプを探す大学探検を実施し、同校2年生66人と引率教員3人、本学の教員1人と生活・総合専修の学生12人の合わせて82人が参加しました。

今回の大学探検では、学内に25か所のスタンプと3つのシークレットスタンプがあり、班ごとに地図を見ながらスタンプを探しました。3つのうち2つのシークレットスタンプは生活科教育講座の西野雄一郎准教授と事務職員がそれぞれ持って学内を動き回り、子どもたちは「どこに隠れているかな？」「あっちで見たよ！」と班同士で声を掛け合いました。残りのシークレットスタンプがある附属図書館を探検した子どもたちは、職員から



探検に出発だ！



大学の図書館にはいろんな本があるんだねえ。

図書館にどんな本があるのか、なぜこのような本があるのかなどの説明を聞き、興味深く聞いていました。

ゴールである講堂前では、再び愛教ちゃんのエディが子どもたちを温かく出迎えました。子どもたちは班の担当学生からメダルを首にかけてもらい、プレゼントをもらって大はしゃぎでした。閉会式を終え、子どもたちは「また来るね！」「楽しかったー！」と言いながら小学校へと帰っていきま

した。参加した子どもたちからは「スタンプラリーが楽しくて、全部集められてうれしかった」「大学がとても広くてびっくりした」などの感想が寄せられました。



遠足や校外学習等の新たな目的地としての提案

附属岡崎小学校の4年生が来訪しました

9月11日（水）、本学附属岡崎小学校の4年生87人と、引率教員3人が本学を訪れました。

教職員による8つのプログラムから、午前と午後の一つずつプログラムを選んで体験しました。加藤恵梨准教授による「大切な人に"思い"を伝えよう！」では、ワークシートを使いながら、大切な人に感謝の気持ちを伝える手紙を書きました。澤正実特別教授による「あいきょう大きいものさがし隊」では、図鑑を用い自然観察実習園でさまざまないきものを探しました。西川愛子准教授による「ひとりのできるもん！Textile編」では、紙製の簡易な織り機を使い、好きな糸で織物を作る体験をしました。新山王政和教授による「い



どの糸で織ろうかなあ〜（西川愛子准教授による「ひとりのできるもん！Textile編」）

ろいなる音に触れてみよう！」では、さまざまな演奏を聴き、東南アジアの竹でできた楽器に触れて音色を楽しみました。中池竜一准教授による「プログラミングでおそうじロボットを動かそう」では、Root（ルート）ロボットを使って、プログラ

ミングで迷路に挑戦しました。高嶋香苗助教による「フットホッケーに挑戦しよう」では、やわらかな円盤状のディスクを蹴り合って相手のゴールにシュートするゲームを体験しました。筒井和美准教授による「カードゲームであそぼう！」では、野菜を育てるのに役立つ知識をカードゲーム形式で学びました。大学職員による「図書館ツアー」では、大学の附属図書館を見学し、所蔵している100年以上前のめずらしい本などを見ました。

子どもたちからは「お父さんに書いた手紙を渡したら、よろこんでくれた。手紙の力を知った」という感想が寄せられました。

引率の附属教員からは「大学がどういうところなのか、あまり知らない子どもたちにとって、とても貴重な時間になったのではないかと思います。子どもたちからは、「もっとやりたかった」「また行きたい」という声が多数あがっていました」という感想をいただきました。



先生ー！名前の分からない生き物がいるよー！（澤正実特別教授による「あいきょう大きいものさがし隊」）

附属特別支援学校高等部1・2年生が本学を訪問しました

6月25日（火）、本学附属特別支援学校高等部1・2年生20人と引率教員7人が遠足で本学を訪れました。

体育館附属棟に移動すると保健体育講座の成瀬麻美准教授と学生たちが生徒たちを歓迎し、ダンス交流が行われました。生徒と学生が二人一組になり、お互いの動きをまねしたり、新聞紙を使って戦いごっこをしたりと、いろいろなダンスを楽しみました。



いざ、尋常に勝負！

お昼の時間になり、生徒たちは第一福利施設に移動して、学食でお昼の食糧を注文し大学生気分を味わいました。

昼食後はAUEスクエアに移動し、生徒たちが学校で作ったたくさんの工芸製品をみんなで販売しました。大きな声で「い

らっしゃいませー」「どうぞ見ていってください」と元気に声掛けをすると、たくさんの教職員や学生が訪れ、素敵な製品の一つ一つ手に取ってお気に入りを見つけて購入していききました。

販売を終えた子どもたちは、充実感に満たされた笑顔でバスに乗り込み、大学を後にしました。

生徒たちからは「やさしくダンスを教えてくれたこと、大学生に合わせていろいろな動きができてよかったです」という感想が寄せられ、引率した教員からは「附属学校ならではの取り組みだと思いました。大学との連携があることで、特別な体験ができたと思います」という感想をいただきました。



学長先生、これがおススメだよ。

附属幼稚園4歳児クラスが自然観察実習園でさつまいも掘りを行いました

10月22日（火）、夏の暑さ秋空の下、附属幼稚園年中クラス（赤組、青組）が担任教諭、養護教諭らと共に来学し、野田敦敬学長が出迎える中、本学の教職員と幼児教育専攻の学生含め総勢60人が自然観察実習園での「さつまいも掘り」を行いました。

自然観察実習園の作業員からさつまいもの生育について説明があった後、園児達は元気いっぱいに畑に散らばり、さつまいも掘りがスタートしました。

園児が意気揚々とスコップを手にしたところで、附属幼稚園の教諭から「大きなお芋を掘るぞー」と掛け声がかかり、園児達の「エイ、エイ、オー」と元気いっぱいな声を合図に、さつまいも掘りがスタートしました。

昨年に比べ、さつまいもの生育が良く、園児の手の平には収まりきらない大きなさつまいもを収穫し、園児の賑やかな声と学生の笑顔が溢れ、園児だけでなく、教職員や学生にとっても非常に貴重な体験の場となりました。

附属高等学校サスティナ部の取組「切ってつなげるバンブーロード—第3章—」

附属高等学校サスティナ部が、同校と自然観察実習園との境目にある放置竹林の整備を始めたのは4年前です。部活動として「学校内に持続可能なサイクルを作る」ことを目指し、長年に渡って見過ごされてきた鬱蒼とした放置竹林を身近で再生可能なリソースと見定めました。

竹林整備は他県で実施されている方法などを参考に進めました。色褪せた古い竹の伐採（やがて朽ちる1m切りと呼ばれる方法を採用）、すでに枯れた上に折れて危険な竹の除去を中心に、当初は3、4人の男子生徒たちが地道に進めました。竹林内で切り出し、



4年前の竹林

相当の重量のある竹を担いで作業場（合併教室裏付近）まで運びました。当初、切り出した竹材は竹を使ったモノづくりや、竹炭化する試みが主でしたが、縁あって、実習園の作業員の協力を仰ぐようになってからは、強力な竹チップパーで粉



竹を切り出している様子

砕、チップ化したものを土壌改善等に活用するなど、その利用法の幅を広げることができました。やがて竹林内に季節の日差しが差し込むようになるころには、すでに数百本の竹を切り出していたと記憶しています。

子ども
キャンパ

スプロジェクトに参加させていただくようになって3年が経ち、今では高校から実習園までの道が完成に近づいています。毎年たくさん子どもたちが参加し、楽しみながら体験してくれる姿を見られるのは嬉しい限りです。今後も末永く維持管理が可能な竹林を目指し、本イベントを通じて、大学・高校が共同で作業を続けられることを期待しています。



子どもキャンパスプロジェクトの様子

「すはら池いきものさがし隊」を開催しました

6月2日（日）、「すはら池いきものさがし隊」を開催し、小学生19人とその保護者が参加しました。

当日はあいにくの天気だったため、参加者はまず自然科学棟の教室に入り、本学理科教育講座の澤正実特別教授から生き物図鑑の使い方について説明を受けました。

その後天気が回復したため、みんなで洲原公園に繰り出しました。道の途中で壁にへばりついているカタツムリを見つけてお父さんにとってほしいとねだる子がいたり、池の中にいたヨシノボリの仲間をつかまえて、澤特別教授に「この生き物の名前は何か？」と聞いている子もいました。公園から大学に戻る際には、トイレに幾つもの巣を作っているツバメや水門の近くで気持ちよく泳いでいるカメの様子を見ながら、雨上がりの休日の一時を楽しんで帰ってきました。

子どもたちからは「お父さんやお母さんとまた一緒に来た

い」、保護者からは「いつも来ている公園ですが、生き物の名前をはじめて知りました」といった感想をいただきました。参加者には、洲原公園やその近隣の豊かな自然を身近に感じることで、生き物への関心を高めるだけでなく、郷土に対する愛情を育む非常に有意義な機会となりました。



洲原公園ヘレッツゴー！



小さいお魚がいるよ！

「子どもキャンパスプロジェクト」 使途限定基金の状況報告

2023年11月より、愛知教育大学として初となるプロジェクト等使途限定基金事業「子どもキャンパスプロジェクト」がスタートしています。募集期間は2023年11月から2026年3月までの2年5か月で、目標額は250万円ですが、2025年1月現在で約30万円のご寄附をいただきました。

私たちは、学生が子どもたちとふれあう経験の場と未来を担う子どもたちに笑顔があふれる体験の場を、皆様と共に創っていきますので、ぜひご協力をよろしくお願いいたします。（詳細は次ページをご覧ください）



学長就任時に掲げたキャッチフレーズの一つ「子どもの声が聞こえるキャンパス」は着実に実現できています。夏と秋の「あつまれ！子どもキャンパス」は企画の数も回を重ねるごとに増え、リピーターの子もたちも増えています。2024年はオンラインでの参加申し込みにおいて、開始早々に定員が埋まってしまうまでの盛況ぶりでした。参加してくれた子どもたちが、活動対象への関心を高め、企画してくれた学生に憧れを抱き、教師になってみたいという思いを育んでくれることを期待しています。



「子どもキャンパスプロジェクト」へのご支援について



遊ぶこと、
学ぶこと、
教えることを
共に創る。

愛知教育大学 未来共創プラン戦略1

子どもキャンパス プロジェクト 支援のお願い

愛知教育大学公式
マスコットキャラクター
「エディ」

愛知教育大学公式
マスコットキャラクター
「愛教ちゃん」

「子どもキャンパスプロジェクト」ってなあに？

「子どもキャンパスプロジェクト」とは、学校教員や教育を支援する専門職を目指す学生が、大学のキャンパス及びその周辺地域で、子どもたちと共に「遊び」から「学び」を創り出す経験を通じて、これらの職業に必要な資質・能力を高める取組です。

これらの職業を目指す学生が、プロジェクトを通じて改めて「教える」ことの大切さ・おもしろさに気づくとともに、子どもたちに楽しい遊びや素敵な学びを体験してもらいます。

プログラム No.1
「愛教の馬に会いに行こう！」



「馬に乗ったときに、思いのほか高くて、驚いた。馬に触れて、とってもかわいかったです。」

これまでもたくさんの
「子どもキャンパス」が
実施されています！

プログラム No.2
「大学生とミニ運動会！」



「負けたり勝ったりで、どちらが勝つかハラバドキドキして、種目も面白かった」

プログラム No.3
「大学のふしぎ発見！
鎌倉時代の遺跡をさがせ！」



「お兄さんやお姉さんが優しく、寮のことについて話してくれたから、おばあちゃんやおじいちゃんに聴かせてあげたい！」

子どもキャンパスに参加した学生たちの声

- ・「子どもたちが目を輝かせて馬と触れ合う姿を見てやって良かったと感じました」
- ・「授業などのかしまった場以外でこんなにもたくさんの笑顔が見られると思わなかった」
- ・「教育実習や学校現場とはまた違う環境下で遊んだり学んだりできるのは面白いと思った。また、子どもの様子も学校の場とは違う面があると思うので、見ていて楽しかった」

寄附金の使途

いただいたご寄附は、プロジェクトの実施に必要な消耗品の調達、外部講師の招聘費用、その他プロジェクトの運営に関する諸経費などに活用させていただきます。



寄附金額とお礼について

- 一口 1,000 円より受け付けております。(複数口のご寄附を歓迎致します)
- ご寄附いただいた方には、本学未来基金ホームページの芳名録への掲載の他に、金額に応じて次のお礼の品々をご用意しております。(水色部分は未来基金より贈呈)



寄附金の累計		100万円以上	50万円以上	10万円以上	5万円以上	3万円以上	7千円以上	5千円以上	3千円以上
お礼の品									
愛教ちゃん・エディの鉛筆・消しゴム・ノートセット	1セット								
	2セット								
	3セット								
寄附者氏名を掲載・贈呈	「子どもキャンパスプロジェクト」イベントチラシ								
	「未来共創プラン」報告書								
愛教ちゃん・エディのぬいぐるみ(計2体)									
本学管弦楽団等の演奏会等にご招待									
感謝状	郵送で贈呈								
	贈呈式で贈呈								
銘板	シルバー								
	ゴールド								

寄附の手続きについて

本学ホームページでお願い致します。

<https://www.aichi-edu.ac.jp/intro/kikin/procedure.html>

右のQRコードからアクセスすることも可能です。

お支払い方法により手続きが異なります。「事業の種類(基金の種類)」は「子どもキャンパスプロジェクト」をお選びください。



(1) インターネットによるご寄附

■クレジットカード決済(利用可能なクレジットカードは以下のとおり)



■コンビニ決済(利用可能なコンビニエンスストアは以下のとおり)



■インターネットバンキング決済 (pay-easy (ペイジー))

(2) 振込用紙によるご寄附

振込用紙によるご寄附をお考えの方は、本学ホームページにある「ご寄附の事前連絡フォーム」よりご請求ください。専用の振込用紙を郵送いたします。

(3) 大学窓口でのご寄附

本部棟1階財務課出納係へ直接ご持参下さい。平日 8:30 ~ 17:00



寄附金に関する税制上の優遇措置

愛知教育大学へのご寄附については税制上の優遇措置があります。

(1) 寄附者が個人様の場合

「所得控除」の適用が受けられます。個人所得に応じた税率によって以下のとおり控除額が決定します。

[a 寄附金額 - 2,000 円] ×
(所得額に応じた) 税率 =

所得控除額

(2) 寄附者が法人・団体様の場合

本学は、財務大臣から指定寄附金(法人税法第37条3項第2号)の指定を受けていますので、寄附金の全額を事業年度の損金に算入することができます。



国立大学法人
愛知教育大学
AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

お問い合わせ：愛知教育大学企画課未来共創推進室

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

TEL:0566-95-3601 e-mail:mirai@m.auecc.aichi-edu.ac.jp



教育リソースデータバンクを設置し、教育現場の課題解決に貢献する教育のプラットフォームを構築します。

- ケーブルテレビ、教育委員会、学校現場と連携し、地域の教材コンテンツを作成する。
- ケーブルテレビと教育委員会、小中学校をつなぐシンポジウムを開催する。
- 学内外で活用可能な教材等を収集・整理・保存するとともに、必要に応じて制作する。

プロジェクトメンバー

真島 聖子 小塚 良孝 鈴木 佳樹 富田 啓介 紀村 真一郎 太田 知啓 井成 浩文 浅岡 明美 前田 祥子

シンポジウム「地域社会と共に創る防災学習とまちづくりーレジリエント社会の実現を目指してー」を開催

12月21日（土）本学第一会議室において、津島市・常滑市・刈谷市の3市の教育委員会・小中学校・各地域のケーブルテレビの関係者や中学生をシンポジストとして招き、一般社団法人国立大学協会と未来共創プラン戦略2「教育のプラットフォーム構築プロジェクト」の共催で、2024年度レジリエント社会・地域共創シンポジウム「地域社会と共に創る防災学習とまちづくりーレジリエント社会の実現を目指してー」を開催しました。本シンポジウムには、自治体及び教育関係者、本学学生及び教職員など、あわせて80人が参加しました。

第Ⅰ部では、津島市・常滑市・刈谷市地区のシンポジスト（下記参照）が、各地区における防災への取り組みについて成果や課題を発表しました。また、本学の学生が「子どもキャンパス

プロジェクト」での防災に関連した活動を紹介しました。

第Ⅱ部では、防災学習とまちづくりについてグループディス



シンポジストとして参加した中学生の発表

カッションを行いました。参加者からは「まちづくりには地域の日常的・継続的なつながりが不可欠だと感じた」「防災を自分事として捉えることが重要だと感じた」などの意見が挙がりました。



グループディスカッションの様子

最後に、シンポジウム全体の振り返りとして、野田敦敬学長は「皆さんが熱心に議論を交わす様子を見て、レジリエント社会を実現するためのキーワードは『連携』なのだと

感じました」と感想を述べました。

本シンポジウムに期待した効果と成果について把握するため、シンポジウム終了後に、第Ⅰ部のシンポジウムと第Ⅱ部のグループディスカッションに対する満足度を問うアンケートを実施しました。アンケートの対象者は80人、回答者は58人、回答率は72.5%でした。

第Ⅰ部・第Ⅱ部ともに、参加者の満足度は高く、「とても満足」と回答した人は、7割を超えました。また、本シンポジウムに参加して、大学・学校・企業・地域社会が連携することについて、「とてもよく考えた」と回答した人が、56人（96.6%）にのぼり、本シンポジウムの目的を達成できたと考えます。

参加者が、中学生・高校生・大学生・大学院生・小中学校の教員・地域の方・保護者の方・教育委員会・企業の方など、異なる地域の幅広い年齢層の方々が参加していただいたことで、互いに学び合い、真剣に語り合い、共感し合う姿が見られました。本シンポジウムにおいて、国立大学が果たすべき役割について再確認し、学校や地域、企業をつなぎ、よりよい社会づくりに貢献することができたことが成果であると考えます。

津島市教育委員会	教育長	浅井厚視氏
津島市立蛭間小学校	校長	川口歩氏
津島市立蛭間小学校	教務主任	水野泉氏
蛭間小学校区防災キャンプ担当		牛田富也氏
西尾張シーエーティーヴィ株式会社	代表取締役社長	中野治也氏
常滑市教育委員会	教育長	土方宗広氏
知多市立つじが丘小学校	教頭	福島秀一氏
常滑市立南陵中学校	生徒	10名
知多半島ケーブルネットワーク株式会社	代表取締役社長	江口正洋氏
刈谷市教育委員会	教育長	金原宏氏
刈谷市立依佐美中学校	生徒	3名
株式会社キャッチネットワーク	感動メディア1課 課長	武田尚也氏

シンポジスト一覧



本学学生による活動紹介

また、このシンポジウムをきっかけに、レジリエント社会の実現に向けて、学校や地域、家庭や職場で話し合ったり、地域のつながりの大切さを再認識したり、これから地域を共に創る一員としての意識を高められたと考えます。

なお、アンケートに書かれていた参加者の主な感想は以下のとおりです。

【教育長】市によって防災の取組内容が違い、参考になった。また、中学生にとっては他の地域の方との意見交流は貴重な体験となった。

【中学校教員】大学・学校・企業・地域社会が連携することで、



ディスカッションに参加する野田学長

生徒たちが知らないことや私たち教員では気がつかないところを教えてください。きっかけになると思った。

【ケーブルテレビ関係者】それぞれの立場でどんなことを考えているのか分かります。ケーブルテレビとして今後の取材内容など考えさせられた。

【中学生】今は、地域社会のつながりが少し減っているように思えるので、これからどのように動けばいいのかを考えることができた。



シンポジウムのチラシ

本学所蔵の授業記録が名古屋大学大学院の授業の教材として活用

10月31日（木）、名古屋大学大学院教育発達科学研究科の学生と教員 合計 34 人が来学し、本学名誉教授である 故 霜田一敏先生より本学に寄贈された授業記録が授業の教材として活用されました。

本件は、2024 年 1 月に開催した教職キャリアセンター教科教育学研究部門と未来共創プラン戦略2「教育のプラットフォーム構築プロジェクト」の共催シンポジウム「授業記録を通して学び合う価値とは何か？」の参加をきっかけに、実現したものです。野田敦敬学長をはじめとする本学関係者の開会あいさつの後、参加者は 6 つのグループに分かれ、大学会館内書庫に所蔵されている授業記録の閲覧と、割り当てられた授業記録につ

いての検討や意見交換を行いました。

参加者の中にはご自身が 40 年前に書かれた授業記録を見つけた方もいらっしや、当時の様子について熱心に話をされていました。

グループ毎の発表では、授業記録には教師のエネルギーや生徒の動きを詳細に伝える役割や、授業分析が教師と生徒の関係性や教育の質を向上させる役割があること、また、教師には生徒の自発的な学びを促す役割があることについて意見がまとめられました。また改めて長年にわたる研究活動とおして収集された資料が閲覧できる場があることについて、謝意を受けました。



授業の様子



書庫で意見交換を行う参加者

国立大学協会が募集するシンポジウムには、私が学長に就任以来毎年応募しています。二つの領域がありますが、能登半島での震災を受け、2024 年は初めて「レジリエント社会・地域共創シンポジウム」に応募しました。大変多くの大学からの応募がありましたが採択を勝ち取ることができました。津島市・常滑市・刈谷市においては他の戦略のシンポジウムでも学校・教育長・ケーブルTVでご登壇いただいています、防災という視点で充実した時間を過ごすことができました。



学長ポイント



よりよい教育の未来につながる教職の魅力を共に創り出し、発信します。

- 「教職の魅力共創シンポジウム」を通して、多様な立場の方々との意見交換を行う。
- 教職の魅力を伝えるリーフレットや動画コンテンツを作成する。
- 多様な立場の方々から原稿を募集し、シリーズ叢書『教職の魅力共創』を刊行することで、地域社会と共によりよい教育の未来につながる教職の魅力を共創する。

プロジェクトメンバー

真島 聖子 小塚 良孝 宮川 貴彦 竹川 慎哉 田口 達也 井成 浩文 浅岡 明美 前田 祥子

シンポジウム「新たな学び・学校のかたちー対話的・協働的な学びを共に創るー」を開催

6月16日(日)、本学が掲げる「戦略3:教職の魅力共創プロジェクト」とベネッセ・コーポレーション「未来の教育を考える会」の共催でシンポジウム「新たな学び・学校のかたちー対話的・協働的な学びを共に創るー」を開催し、県内外から高校生・大学生、教職員、保護者、自治体関係者、教育産業界関係者等約90人が参加しました。

本シンポジウムでは、高校生・大学生が社会参加するにあたり、声を上げてほしいような雰囲気や風土をつくるために、高校生・大学生の声を聴くことから始め、信頼をベースに高校生・大学生と大人が対等にかかわる場としました。

第Ⅰ部では、「いい学びとは」、「いい先生とは」、「新しく学

校を創るとしたらどのような学校や学びを創るか」という3つの問いに対して、高校生・大学生の声を聴き、学生、教員および教育業界関係者等が一緒になってグループディスカッションを行いました。話し合い後に「新たな学び・学校のかたち」について、高校生・大学生からの提案がありました。

第Ⅱ部では、対話的・協働的な学びを共に創ることを意図して、名古屋市立守山小学校教諭の佐橋慶彦氏、愛知教育大学非常勤講師の深見太一氏、春日井市立松原小学校教諭の石原浩一氏から教育現場における実践からの提案がありました。第Ⅰ部で話し合った理想像と実際の教育現場での具体的な実践方法を結びつけながら、学びを振り返りました。



開会のあいさつを行う野田敦敬学長



第Ⅰ部 高校生からの提案



第Ⅰ部 グループディスカッションの様子



第Ⅱ部 講師による提案

終了後の参加者アンケートでは、「普段学校で感じていることを話す機会はとても少ないので、この会で本音を伝えることができてとても良かった」「対等なアウトプットが多く、表現することが楽しかった」「今の生徒さんたちの生の声を聞くこ

とができ、『学び』ということを実感することができた」といった回答があり、学生と大人の対等な交流がみられたシンポジウムとなりました。



第II部 グループディスカッションの様子



学びの振り返りの時間

国立大学法人愛知教育大学「教職の魅力共創プロジェクト」る
ベネッセコーポレーション「未来の教育を考える会」 共催 シンポジウム

新たな学び・学校のかたち

対話的・協働的な学びを共に創る

2024.6.16 (Sun)
13:00 ~ 17:00 受付開始 12:30 より

愛知教育大学 次世代教育イノベーション棟にて

参加申し込みはこちらのQRコードより

国立青少年教育振興機構が2020年度に実施した「高校生の社会参加に関する意識調査」では、調査をした日本の高校生の95.2%が意見表明することは良いことであると答え、9割を超える高校生成が「学校の運営や今後の方針などについて学校が生徒の意見を求めるべきだ」と回答している。その一方で、日本の高校生の社会参加に関する意識は、公的な事項よりも趣味やバイトなど私的な事項に偏る傾向が見られた。両角達平（2021）は、こうした背景には、そもそも、声をあげてもいいような雰囲気や風土がないことが日本の高校生の「積極的参加」を阻んでいる可能性があることを指摘している。

そこで、高校生・大学生の声を聞くことから始め、信頼をベースに高校生・大学生と大人が対等に話せる場として、「新たな学び・学校のかたち」について、高校生・大学生の声を聞き、高校生・大学生からの提案を受ける。第I部では、「対話的・協働的な学びを共に創る」ことを目指して、3人の教育者による提案とグループディスカッションを繰り返したのも、学びの振り返りを行う。コミュニケーションが成立したという実感を参加者と共有することをゴールとした。

シンポジウムのチラシ（表）

新たな学び・学校のかたち

タイムスケジュール	講師紹介
12:30 受付	講師：佐藤 康彦 愛知教育大学 教育学部 教授 「未来の教育を考える会」 実行委員 講師：深沢 太一 愛知教育大学 教育学部 教授 「未来の教育を考える会」 実行委員 講師：石原 一哉 愛知教育大学 教育学部 教授 「未来の教育を考える会」 実行委員 司会：佐藤 浩之 ベネッセ 教育研究センター 研究員
13:00 開会のあいさつ	
13:10 趣意説明	
13:20 第I部：新たな学び・学校のかたち	
13:20 グループディスカッション～高校生・大学生の声を聞く～	
14:50 休憩	
15:05 第II部：対話的・協働的な学びを共に創る	
15:10 提案①：対話的・協働的な学び	
15:20 グループディスカッション①	
15:35 提案②：協働的な学び	
15:45 グループディスカッション②	
16:00 提案③：対話的・協働的なICTの授業活用	
16:10 グループディスカッション③	
16:25 学びの振り返り	
16:50 開会のあいさつ	
17:00 終了	

キャンパスマップ

愛知教育大学
〒464-8602
愛知県豊田市緑町1-1
http://www.aichi-edu.ac.jp

問合せ | 愛知教育大学 学術研究支援課 研究支援係
TEL: 0566-26-2109(2119) MAIL: res@aij.ac.jp

シンポジウムのチラシ（裏）

教員志望に関する学内調査結果の統合と分析に向けて

公立学校教員採用選考試験の受験者数減少傾向を食い止める対策を講じる上で、本学学生の入学時から卒業時までの教員志望度の変容と実際の進路を結びつけて分析することが重要です。在学中の教員志望度の変容と進路に関する情報を得て分析を行うためには、本学の各部署が個別に実施している調査内容を把握してデータを収集して、分析可能な形にデータを整形する必要があります。上記のような観点から、本学の2つの部署

で実施している教員志望に関する調査結果を収集して、特定の入学年度の学生に対して入学時の志望と在学中の経年変化ならびに教員採用試験の受験・未受験の調査結果を統合しました。今後は、本学のデータ活用ポリシーに則り、教員志望度向上のための方策策定に必要な分析データを提供することを目指します。

叢書「教職の魅力共創」の 7 号と 8 号を刊行

2024 年度の叢書「教職の魅力共創」は、社会共創編『新たな学び・学校のかたち (4)』、教科領域編『新しい価値を創造する情報教育』を刊行しました。

シリーズ概要

愛知教育大学（主催「教職の魅力共創」編集委員会 委員長 野田敦敬）では、多様なステークホルダーが「教職の魅力」を共に高め、創り、共有していけるような場として、叢書シリーズを立ち上げました。

本シリーズには、学校教育や教職について広く考えを求める「社会共創編」と、各教科等の視点から多面的な教職や教材等の魅力を共創・共有する「教科領域編」があります。



叢書「教職の魅力共創」⑦

新たな学び・学校のかたち (4)

著 者	編集：「教職の魅力共創」編集委員会
発行日	2025 年 3 月発行
定 価	1,000 円（税込）
出 版	愛知教育大学出版会

本書は『新たな学び・学校のかたち』という統一テーマで、以下の三つの内容を取り上げました。

- (1) 企業、NPO、専門家等と連携した教育活動や取り組み
 - (2) 不登校児童生徒への支援に関わる取り組み
 - (3) 多様な子どもを伸ばす探究的な教育活動や取り組み
- 全国の多様な教育関係者による計 19 本の論考が収録されています。

叢書「教職の魅力共創」⑧

新しい価値を創造する情報教育

著 者	編集：「教職の魅力共創」⑧編集委員会
発行日	2025 年 3 月発行
定 価	1,000 円（税込）
出 版	愛知教育大学出版会

本書のコンセプトは、情報領域の魅力および情報領域から見た教職の魅力を共創・共有することにあります。本書では本学の情報教育講座に所属する教員や教職大学院生、さらにプロジェクトを共に進めている教職キャリアセンターの教員が執筆しました。また、本学の情報コースを卒業し、現在活躍中の小学校や高校の情報科の先生方から、魅力や意義について多くのお話を伺い内容をまとめ、以下の 4 章を構成しました。

- 第Ⅰ章 大学教員からみた情報の魅力
- 第Ⅱ章 教職大学院生からみた情報の魅力
- 第Ⅲ章 小学校教員からみた情報の魅力
- 第Ⅳ章 高等学校情報科の教員からみた情報の魅力



協定校を始めとする海外の教育機関との連携を密にして、グローバル化に対応したプログラムを学部と大学院で整備します。

- 海外協定校に赴き、研究者等の招待・派遣制度の整備について検討するとともに、海外の教育現場を視察することで教職員の国際理解研修を行う。
- 教職大学院に入学した教育委員会派遣、附属学校教員が海外研修できる制度を構築することを検討する。

プロジェクトメンバー

岩山 勉 小塚 良孝 高木 遠慧 真島 聖子 北野 浩章 マイヤー オリバー 野平 慎二 寺本 圭輔 ベネマ ジェームズ 幅 良統
玉越 貴文 高坂 渚 山岸 達也

グローバル化に対応した教員養成プログラムの新規開発・実施及び検証

国際感覚と語学力を高めることや国際理解教育の先導的役割を担い得る教員の養成に資するため、7月4日（木）、本学にて中国・陝西師範大学と学生短期留学プログラムに関する合意書を締結し、野田敦敬学長はじめ役員、国際交流センター関係者と同大学の游旭群学長、李森教育学部長はじめ関係者と、プログラムの実施等に向けた意見交換を行いました。これを機に、2025年度における同大学での海外研修プログラムを作成する予定です。

また、カンボジアの教育省及び国立教育研究所（NIE）の協力を得て、特に現職教員の大学院生を念頭に置いた海外研修プログラムを作成し、日本学生支援機構（JASSO）「海外留



中国・陝西師範大学との締結式

学支援制度（協定派遣）」の支援希望事業として申請し、採択されました。3月には教職大学院の教員1名をNIEへ派遣し、プログラムの内容について、NIEの大学院の院長であるMAM Chansean氏（本学の博士課程出身）等の関係者



カンボジアの教育省及び国立教育研究所関係者との打ち合わせ

と打ち合わせを行いました。2025年度4月より、教職大学院の現職教員に向けて参加者を募集し、実施する予定です。参加者のプレ・ポスト報告書に基づき、教育委員会に対し国

際理解向上等のアンケートも行う予定です。

2024年度に実施した大学院生、学部生がともに参加できる海外研修（教育実践）プログラムについては、以下のとおりです。



カンボジア・国立教育研究所教職員及び学生との交流

タイ・チェンライラチャパット大学

【期間】8月3日～9月1日

【派遣者】教職大学院生1人、学部生2人

【派遣先での活動】

- (1) 現地の高等学校で、日本語指導の見学、日本文化の指導、紹介などを行うものへ参加。
- (2) 同大学で、日本語教育教材の作成、日本語の模擬授業の実施。



協定校の大学生とのフィールドワーク



協定校の大学生への日本文化紹介

アメリカ・インディアナ州立大学

【期間】8月4日～8月20日

【派遣者】学部生7人

【派遣先での活動】

(1) 同大学教育学部関連の小学校で、教師中心の教育評価の現状把握、授業参観、本学学生による模擬授業の実施。

(2) 同大学教育学部で、学習評価制度・実践及び指導改善について先方の教職員、学生（留学生含む）と意見交換。



インディアナ州の日系企業駐在員の家族との交流



協定校の関連小学校にて日本文化紹介の模擬授業

ドイツ・フライブルク教育大学

【期間】9月1日～9月25日

【派遣者】教職大学院生1人、学部生5人

【派遣先での活動】

(1) 同大学で、ドイツの学校運営、教育制度について学生・教職員との意見交換、情報交換を行い、フィールドワークを実施。



フライブルク市内の高等学校への訪問・交流

(2) 同大学関連の小学校・中学校・高等学校で、日本文化紹介などの模擬授業を実施するとともに、教員の働き方について情報交換。



フライブルク市内の高等学校での模擬授業

韓国・国立晋州教育大学校

【期間】9月4日～9月19日

【派遣者】教職大学院生3人、学部生5人

【派遣先での活動】

(1) 同大学校附属小学校・公立小学校で授業実践。私立高等学校で日本語授業参観。

(2) ソウル市での多岐にわたる探求テーマに沿ったフィールドワークの実施。



協定校の附属小学校での模擬授業



私立高等学校の日本語授業への参加

モンゴル・国立教育大学

【期間】9月10日～9月17日又は24日

【派遣者】学部生14人

【派遣先での活動】

同大学で、科学・ものづくり教育や日本文化の紹介、異文化体験。同大学や現地の小学校・中学校・特別支援学校で、授業補佐を通じた実習。



ウランバートル市内小学校での授業観察



協定校での民族衣装・異文化体験

2024年度はコロナ禍も完全に明け、この戦略も本格的に動き出しました。多くの協定校から教員・学生等の訪問もありました。中でも中国の陝西師範大学の游学長の訪問と創立80周年記念式典への招待は驚きでした。10月には西安を訪問し、何もかも本学の10倍規模の大学の盛大な式典で、初等教育の大切さと「地域協働教育体験活動」の導入等について話してきました。私自身、グローバル化の一層の推進を強く感じた1年でした。



附属学校園と教職大学院との連携を強化し、教育の実践的研究拠点を構築します。

愛知教育大学と同附属高等学校との連携で実施される探究活動である「附高ゼミ」をフィールドとして、高校教員を目指す教職大学院生が「共創的探究活動指導力」を身に付けるとともに、高校教員が探究活動のファシリテート力をより高め、豊かにすることを目的とするプログラムの開発を行う。

「共創的探究活動指導力」とは、多様な他者との共創、協働を通して探究活動を実践できる力である。

プロジェクトメンバー

杉浦 慶一郎 西牟田 哲哉 黒岡 孝信 小塚 良孝 真島 聖子 石川 恭 國府 華子 山根 真理 花井 和志 岩田 吉生 加藤 淳太郎
宮川 貴彦 柿崎 和子 齋藤 ひとみ 筒井 和美 西川 愛子 村松 愛梨奈 小田原 健一 青山 昌平 足立 達彦 宮本 真衣
有本 明日翔 古川 ゆう子 鬼頭 百合子

附属高等学校と連携した教職大学院の院生研修

附属高等学校では教職大学院生が、授業支援、行事運営、ティーム・ティーチングを用いた学習の支援、各々の興味に合わせた分野で研究活動を行う「附高ゼミ」へのサポート等に携わっています。

「附高ゼミ」は生徒自身の興味関心のある分野ごとに分かれて探究活動を行うもので、院生は、課題の切り口の捉え方、研究の進め方、データの分析方法など、様々な



教職大学院生による授業の様子



教職大学院生によるサポートの様子

面で生徒の目線に立ちサポートを行っています。生徒たちにとって院生は、年齢が近く気軽に質問などができる存在となっています。生徒たちは、意欲的で積極性のある姿が多く

見られ、サポートにあたる院生も非常にやり甲斐を感じています。また、様々な生徒たちと触れあう中で、院生自身の教員としての資質や教育観も磨かれています。

附属高等学校と大学との連携：「附高ゼミ」の探究活動を大学教員が支援①

高校の担当教員と連絡を取り合いながら、2年生と3年生の支援に入りました。3年生は、2年生の探究からそれぞれさらに深めることができおり、それぞれの調査の結果の解釈について議論に発展することもあり、2年生からの積み重ねの成果を感じると共に、こちらが多くの刺激をもらいました。また、3年生の発表を聞いている2年生もすばらしく、探究への熱量を感じました。2年生は、自身の探究テーマを定めること、探究を進めていく方法を考えることなど、決定しなくてはならないことが多いため、本人が何を考え、求めているのかを引き出すことが支援する側としても重要と考えています。対面で話ができることが一番ですが、その時間は限られ

ているため、普段の様子をよく知る高校教員との情報交換に加えて、生徒と高校教員と大学教員が共有できるチャートを作成してもらい、生徒の困りごとを共有できるようにしました。また、対面が叶わない場合には、メールでのやりとりも利用してサポートに努めました。チャートには書いていない場合でも、対面で声をかけると、自身の考えをしっかりと伝えてくれます。最初は文字にすることができなくても、ディスカッションを重ねることで思考が整理され、文字で表現することができるようになっていく様子が見られました。自分自身の興味からスタートしているからこそ、深い学びにつながっていると感じています。

附属高等学校と大学との連携：「附高ゼミ」の探究活動を大学教員が支援②

3年生の探究活動では、高校教員と連携・相談しながら、生徒の状況に応じて支援を行いました。教室内での支援をはじめとして、内容によっては学外専門家との連携を促す支援も行いました。例えば、スポーツマネジメントや広報をテーマに探究を進める生徒に対しては、実際に外部でスポーツチームの広報を担当する企業と連携し、インタビュー調査に協力していただくなど、生徒の探究活動は学内に留まらず、状況によっては学外にも活動拠点を広げています。2年生について

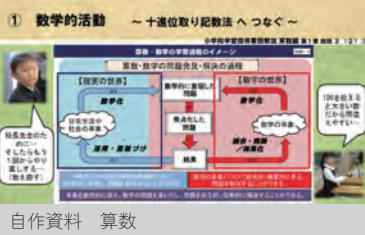
では、探究を進める中で、生徒とディスカッションをしながら、必要な資料やデータ、方法などを提示して、選択肢を広げるサポートを進めています。



創造科学の活動風景

附属岡崎小学校と連携した教職大学院の授業「研究・研修のデザイン」

2024 年度後期授業「研究・研修のデザイン」は、現職の教職大学院生が受講しています。授業の一環として、附属岡崎小学校の研究発表で公開授業を参観し、参観した授業について、自作資料を用いながら指導・助言のシミュレーションを行いました。自作資料は、院生が指導案を読み込み、当日の授業記録や映像資料をもとに指導・助言する際のポイントを見だし、時間をかけて作成したものです。シミュレーションの様子をビデオで撮影し、授業者の教員に見ていただきました。授業者からは『「見つめる力」「結びつけて考える力」について



でも単元構想や本時から分析していただき、自分も先生から教えていただいた視点で授業を振り返り、次の展開につなげていきたいです。」「先生のプレゼンテーションを拝聴させていただき、改めて、子どもの活動を見とり、子どもの活動状況を把握して授業を構想していくことの大切さを感じました。」等のコメントをいただき、附属岡崎小学校の研究分析の一助となったことがわかります。院生、附属岡崎小学校、双方にとって学びあるものになりました。

附属名古屋小学校と連携した教職大学院の授業「教科教育の理論と実践（小学校社会）」における院生のレポート

《愛知教育大学附属名古屋小学校6年生》

明治の国づくりを進めた人々の実践から、主体的な授業に向けて教師の工夫を3点学びました。1点目は、30年前の同じ場所の写真を準備していた点です。児童の様子から自然と30年間で何があったのか、どうしてこんなに栄えることができたのかといった驚きの様子を感じ取ることができました。学ぶことへの興味・関心をもたせることができた授業展開でした。2点目は、授業で子ども同士との協働が多く見られた点です。日本が30年間で大きく変わった要因を調べて発表する際、教員が「足りない部分は意見を聞いて補えばいいよ」と声かけをしていました。自分の考えになかったことに気づき、考えを深める授業実践でした。3点目は、深い学びについてです。授業の観察から知識と知識とを相互に関連付けてより一層深く理解することに重点が置かれていました。



《愛知教育大学附属名古屋小学校3年生》

くらしを守るの実践から、主体的・対話的・深い学びの全てにおいてとても勉強になる授業実践でした。前時までに学級内での意見交流が行われており、級友から緑付箋をもらうなど、児童同士の対話がありました。教師が「今日のめあて、どうしようかな・・・」と呟くと、すぐに児童から「緑付箋を見直して、学習問題にさらに近づく・・・」といった反応があり、児童の発言がきっかけとなりめあてが決まりました。学ぶことに対する興味・関心があり学習課題に迫るための見通しがあることによる反応でした。級友から質問を受けたことで子ども110番について詳しく調べることが安全・安心な暮らしに繋がるのではないかと考える児童がいました。また、安全・安心な暮らしにするためには、消防や警察の努力だけでなく、私たち自身がルールやマナーを守る意識が大切ではないかと考え始める児童もいました。この考えはこれまでの知識と新たに得た知識とを相互に関連付けたことで生まれた深い学びではないかと思いました。



平成30年に告示された高等学校学習指導要領の改訂のポイントは「探究」でした。今や「探究」はブームになっており、そこで培われる力は将来我が国を牽引するために必要となります。附属高等学校は、本学キャンパス内にあるという地の利を生かし、「総合的な探究の時間」である「附高ゼミ」を、大学教員・教職大学院生・大学生が協力することで年々充実を図っています。また、両附属小学校を始め、ほかの附属学校園でも教職大学院との連携が深まっています。



大学・附属学校園連携推進プロジェクト

教育委員会や教育現場等との緊密な連携を通して、附属学校園が今後の公立学校等のモデルとなる実証研究に取り組みます。

- 附属学校園に所属する研究主任クラスの教員と大学教員により構成されたプロジェクト・チームが主体となり、毎月1回、リモートで協議会を開催する。
- 附属学校園同士の交流や大学との共同研究によってモデル授業を開発し、研究会・研修会で還元する。

プロジェクトメンバー

杉浦 慶一郎 鈴木 一成 小塚 良孝 真島 聖子 石川 恭 加納 誠司 砂川 誠司 白井 崇宏 松井 健太郎 小嶋 功 鶴飼 聡
星野 恭彦 松本 卓也 青木 景子 柳田 真弥 古川 ゆう子 鬼頭 百合子

研究成果の深化・発展

2021年度から毎月1回のリモート会議を継続することで、情報共有の質がより深まり、大学と附属学校園の共同研究体制の構築に向けて安定した連携体制の整備が進みました。

附属学校園が今後の公立学校のモデルとなるための実証研究の改善サイクル構築および継続のために、附属学校園

の研究等が公立学校に活用されたかどうかを調査するアンケートについて、調査項目の修正および改善を図りました。2024年度は「関心度」「理解度」「活用度」の3つの項目を設定することにより、公立学校等の「活用度」の実態をより的確に把握することができました。

附属幼稚園

2023年度より研究テーマを「わくわくがうまれる環境」とし、子どもたちが様々に心動かして思わず動き出し、夢中になって遊ぶことを楽しめるような環境の構成について考えました。二年次となる2024年度は、わくわくがうまれる環境について仮説を立て、その検証を行うことで、子どもたちがわくわくしている姿を捉え、わくわくする環境の共通点を探りました。



附属岡崎小学校

「子どもの姿で語り合う授業研究協議会」

授業記録をもとに、子どもの発言、動きなどの姿を通して、提案授業が本時のねらいに迫っていたか、どのような教師の出が必要だったかなどを協議しました。協議会の後半では、助言者から専門的なご指導をいただきました。



附属名古屋小学校

「わくわくつながる授業デザイン」をテーマに、子どもも教師も「わくわくする」「ついやってみたいくなる」、3つの資質・能力の育成に「つながる」授業をデザインし、公開授業と意見交換会を行いました。



附属名古屋中学校

深い学びをデザインする授業づくり研究シリーズの最終年次として、各教科の目指す生徒像に近づくために、生徒が主体性を発揮して学習に取り組む様子を公開しました。併せて、本校ホームページに、各教科のカリキュラムを公開し、公立学校のモデルとなるよう努めました。



附属岡崎中学校

子どもの思いや考えを見取り、問題解決的学習過程における「自己考察」と「他者考察」のてだてを講じるタイミングを明確にしました。2024年度は校舎大規模改修のため、参加者を限定して授業公開しました。また、研究の経過を2冊の本(研究のあゆみ4・5)にまとめました。



附属高等学校

第42回高校教育シンポジウム「これからの時代を生きるための資質・能力の育成—探究力とICT—(3年次)」において公開授業を実施したほか、第1分科会の理科、第2分科会の保健体育、第3分科会の総合探究に分かれて授業と分科会を行いました。

附属特別支援学校

「学びを生活に生かす子どもの姿を求めて」をテーマに、自立活動の視点を生かした4つのアプローチを取り入れ、児童・生徒が成功経験を積み重ねることができる授業を公開しました。



大学・附属学校園共同研究論文集「共創」第3号を刊行しました

大学と附属学校園が連携した先導的な教育モデルの開発のために、「大学・附属共同研究論文集『共創』」を刊行しました。2024年度で第3号となりますが、実践研究論文、実践研究ノート、

実践報告に加えて、2024年度の附属名古屋小学校の実践研究をもとに、2つの学会に参加し発表を行った学会報告についても掲載しました。



共創 第3号 (2024年度)

著者 編集：愛知教育大学「共創」編集委員会

発行日 2025年3月発行

『共創』の概要

『共創』は、大学・附属学校園、および地域の研究・実践活動の成果を広く公表するために紙媒体で発行するとともに、愛知教育大学学術情報リポジトリに登録し、電子媒体で公表することを目的とした論文集です。大学教員及び附属学校園の教諭、幼稚園・公立学校教諭による研究をまとめたものとして、総括論文、実践研究論文、実践研究ノート、学会発表報告、実践報告、活動報告、News Letter で構成しています。

附属学校園研究広報動画を制作しました

各附属学校園の取組を広く知ってもらうために、2024年度は第一弾として附属名古屋小学校の研究内容について動画を制作しました。2024年度で3年目を向かえる研究テーマ「わくわくつながる授業デザイン」を基に、子どもたちの様々な資質・能力を育成し、その後につなげていくことによる3年

間を通しての授業づくりを紹介しています。「授業はこうする」というだけでなく、「こういうふうに授業をしてみましたかどうか」という「授業は提案」という附属名古屋小学校のコンセプトがよりわかりやすく伝わるような動画ができました。

毎月オンラインではありますが、各附属学校園の研究の中核を担っている教員と大学教員数名の情報交換の場を設定しており、これが附属間の心理的距離を縮めています。例えば、附属幼稚園の生活発表会を附属特別支援学校の教員が参観したり、両附属小学校の研究授業をお互いに参観したりしました。今後は、将来の学校の姿を先取りするような研究開発を附属学校園全体で取り組むことを期待しています。



教科等横断し、協働的に学び合う次世代型プログラムを開発するとともに、教育効果を客観的に検証する評価システムを構築し、学生の資質向上や大学の授業改善につなげます。

「遠隔・オンライン教育」、「ICT を活用した、効果的な学習支援」、「探究的な学習を通じて協働的に学び合う教科等横断学習」について、調査研究を行い、次世代型教科等横断プログラムを開発する。

プロジェクトメンバー

伊藤 貴啓 上原 三十三 小塚 良孝 竹川 慎哉 真島 聖子 岩田 吉生 松井 孝彦 樋口 一成 宮川 貴彦 縄田 亮太
西野 雄一郎 田舎片 麻未 後藤 成美 柴山 麻衣

シンポジウム「才能へのまなざし—これからの学校、教員養成ができること、すべきこと—」を開催

12月18日（水）、これからの学校教育、教員養成、教育行政では子どもたちの「才能」に対しどのようなまなざしを向けていくべきか、教科横断学習や探究学習の指導力育成の考え方について、シンポジウムを行いました。

第一部では、株式会社 SPACE 代表取締役 CEO の福本理恵氏から「私のパラダイムシフト：ROCKET から SPACE、そして異才から個才へ」と題して講演をいただき、生徒自身が自らの特性や興味関心等についてアセスメントを行い、より自分に適した環境に調整していく学習の「個性化」についての実証研究や、鎌倉市や名古屋市教育委員会の主催で実施している不登校支援や探究学習に関する事業である ULTLA プログラムなどの事例が紹介されました。

第二部では、福本氏と真島聖子学長補佐による対談「個別最適な学びは学校でどこまでできる？どこまですべき？」を行いました。真島学長補佐から、公教育ではなく、民間事業者として教育に携わることの意義、メリッ



自らの経験を交えて講演する福本理恵氏



福本氏と真島聖子学長補佐の対談の様子

ト・デメリットについて提起され、福本氏からは、意思決定の早さ、トライアンドエラーで迅速な動きができる小回りなど、民間ならではの利点、やりがいなどが挙げられるなど、時間が足りないほどの情熱にあふれた掛け合いに、フロアから大きな拍手が送られました。

参加者からは、「自分のことを知ることの大切さ、自分と他人の違いを認識することの大切さを感じました。」「民間教育団体の強みと公教育とどのようにタッグを組んでいくと良いのかという点について知ることができ、もっと詳しく調べたいと感じました。」などの感想が寄せられました。



シンポジウムのチラシ

教科横断学習、探究学習の実践校への訪問調査を実施

2025年2月1日（土）から2月28日（金）にかけて、長野県伊那市立伊那小学校、愛知県大口町立大口中学校、富山県富山市立堀川小学校を対象に、教科横断の視点、環境、指導プログラム、システム評価・学習評価等の観点から訪問調査

を行いました。教員及び学生が訪問し、様々な実践校の実際の現場を見せていただき、特に堀川小学校では、「くらしを豊かに」「より良く」という視点から教科横断学習や探究学習について問い直すような勉強の場となりました。



伊那小学校公開学習指導研究会の様子（教室）



大口中学校視察の様子（学校施設・ドーム）



堀川小学校視察の様子①（体育の授業見学）



堀川小学校視察の様子②（熱心にメモを取る学生）

シンポジウム「あなたはどうつなげる？教科横断！」を開催

2025 年 2 月 16 日（日）、児童・生徒の「生きる力」の育成を図ることが求められるなか「教科横断的な視点を持つためには何が必要なのか」「どんな実践ができるのか」について考えるシンポジウムを行いました。

シンポジストの名古屋市立栄小学校・外山隆久氏、安城市立桜井小学校・井上のり子氏、尾張旭市立西中学校・彦田泰輔氏から講演いただいた後、実際に教科横断的な学習を行うに当たっての「テーマ」「横断している教科」「育成できる力」について具体的に構想する、少人数グループでのディスカッションを行い、活発な議論が交わされました。学内外問わず、現職教員、教育委員会事務局、大学生、大学院生、大学教職員等多様な属性の 45 名が参加し、「シンポ



外山隆久氏の講演の様子



井上のり子氏の講演の様子

ジストのお話を聞き、グループワークでお話できて、教科横断に大事なことが、また少し見えてきた」「教科横断は難しいイメージがあったが、自分の専門分野の中でできることから始めればいいことがわかって、少し安心した」などの感想が寄せられ、教科横断的な学びを実践することを参加者各自が具体的にイメージすることにつながりました。



彦田泰輔氏の講演の様子



グループディスカッションの様子



シンポジウムのチラシ

学習評価の枠組みの構築と協力校の開拓

プロジェクトメンバーによる検討会議で学習評価ルーブリックを作成し、学習評価の枠組みを構築しました。

また、学部教育での教科横断探究カリキュラムに基づいて、大学院教育のカリキュラムを作成しました。

2025 年度からは、教科横断探究教育の資質・能力を育むプログラムとしての学校実習について、刈谷市小学校 5 校に連携協力をいただきます。

佐久島しおさい学校で実践研究を実施

9 月 24 日（火）～25 日（水）、西尾市立佐久島しおさい学校において、学生が授業実践を行いました。

授業実践では、教科横断探究教育の実践として、理科の授業において「水に溶けた物質を見つけ出す実験」、社会科は「世界の住居の特徴と気候」を題材にした授業づくりを行いました。

準備に当たっては、佐久島しおさい学校の先生方にご指導をいただきながら協議を重ねて当日に臨みました。

「ふるさと学習」の参観では、児童生徒の「佐久島太鼓」の



理科の実験を行う様子

練習後に太鼓を叩かせていただきました。また、夕方には校庭で部活動の交流も行い、児童生徒教員と学生と一緒にサッカーを楽しみました。



社会科の授業実践



授業後に協議会を行い、ご指導いただきました



佐久島太鼓を叩かせていただきました！



子どもの個性を生かして、カリキュラムマネジメントを行うには、教科横断的なセンスが不可欠です。2024 年度は、国立の教員養成大学を卒業された福本理恵さんという新風を吹き込むことで活性化を図りました。福本さんには、本学の「教員養成の質向上に関する会議」で異例の委員にも就任いただき、貴重な考えを披露いただきました。また、学生主体のシンポジウムの開催でこのコースの魅力を発信できたと思います。

IR部門を活用して得られた学内外の客観的なデータに基づき、戦略的な大学運営を行うとともに、教職員が協働して柔軟な組織運営を行います。

- ・IR 部門では、戦略的な大学運営を行うことができるよう、学内外の客観的なデータを可視化したファクトブックの作成などに取り組みます。
- ・教職学協働プロジェクトでは、教職学協働の FD/SD 研修や各種イベントの企画・運営を行い、参加を促します。また、教育研究創成センター・FD 開発部門の活動と連携した研究を行います。

教職学協働プロジェクトメンバー

太田 知啓 小塚 良孝 國府 華子 真島 聖子 小倉 靖範 石嶺 ちづる 石川 雅章 西村 三郎 高嶋 香苗 村松 愛梨奈 神谷 知穂 田中 大貴 河尻 直 鬼頭 裕介 鬼頭 宏昭 松尾 雄一

FD・SD 研修会「学修者本位の大学づくりー施設の利用方法の改善と学生・院生の居場所づくりー」を開催

7月3日(水)、FD・SD 研修会「学修者本位の大学づくりー施設の利用方法の改善と学生・院生の居場所づくりー」を開催しました。本研修会は、学生・大学院生・教職員が集まり、学ぶ側(学生・大学院生)と供給する側(教職員)が互いの声を聴き合うことで相互理解を深め、「教・職・学」の協働・コミュニケーションを活発にし、より良い大学づくりにつなげることを目的としたもので、本学の学生・大学院生 17 人と教職員 45 人の計 62 人が参加しました。

研修会では、野田敦敬学長の開会あいさつの後、真島聖子学長補佐の趣旨説明があり、参加者が学生・大学院生・教職員混合の 10 グループに分かれて、グループ討議を行いました。

各テーブルでは活発な意見交換が行われ、最後に各グループの代表者が話し合った内容を発表しました。

最後に、野田敦敬学長から総括コメントが述べられ、國府華子副学長の閉会のあいさつで研修会が締めくくられました。

研修会後のアンケートでは、グループディスカッションに参加したことについて9割以上の参加者が「とてもよかった」と回答し、「今回初めて参加したが、参加しなければ絶対に関わることのなかった先生や職員の方の思いが聞けてうれしかった」(学生)、「全員が課題意識を持ち、解決したいと考えていることが分かり、心強く思った」(教員)、「それぞれの立



野田敦敬学長のあいさつ



真島聖子学長補佐の趣旨説明



グループ討議の様子

場で、現実的かつ建設的に意見交換ができ、新しいものが生まれる可能性を感じることができた」(事務職員)などの感想が寄せられました。限られた時間の中で、参加者の多くが、大学の一員としてより良い大学づくりのために前向きに思考をめぐらすことができ、大変有意義な研修会となりました。

また、この研修会で出された様々なアイデアを実現可能な形にブラッシュアップするため、今回の参加者の中から希望者による検討チームを立ち上げ、教職員、学生を交えたグループに分かれて活動することになりました。

(詳細は、次ページをご覧ください。)



シンポジウムのチラシ

「学生・院生の居場所づくり検討チーム報告会&次年度への挑戦」を開催

7月に開催したFD・SD研修会後に、研修会参加者のうち希望者36人による「学生・院生の居場所づくり検討チーム」を発足し、意見表明と社会参画の2つのテーマを軸に、学生・大学院生、教職員を交えた3グループに分かれてそれぞれ課題を設定し、検討を進めてきました。この成果発表の場として、2025年2月12日（水）に「学生・院生の居場所づくり検討チーム報告会&次年度への挑戦」を開催し、本学の学生・大学院生と教職員の計46人が参加しました。

報告会は、各グループの検討結果の報告及び参加者を交えた意見交換の二部構成で行いました。

各テーマには条件を設定しており、社会参画テーマは、(1) ルールや仕組み、制度などの見直しによって具体的な改善が見込まれるもの(2) 必要性・緊急性が高く、1チーム100万円以下の予算で改善できるもの(3) 年度内に具体的に改善できるものとし、意見表明テーマは、(1) 必要性・緊急性の高い施設の改善(2) 多くの学生や教職員からの切実な要望(3) 実現には多額の予算が必要なものとして、以下のように検討テーマを選定しました。



開会のあいさつを行う野田敦敬学長



発表の様子



全体の様子（意見交流）

第一部の各グループによる発表に続いて、第二部では、メンバー以外の参加者を交え、『次年度どんなことに取り組んでほしいか』をテーマに意見交流が行われました。

参加者からは「今回取り上げたテーマに継続して取り組んでほしい」「より多くの学生や教職員に関わってもらうことが必要だ」などとともに、今回の提案が実現されることへの期待の声が多く聞かれました。

最後に、野田敦敬学長と太田知啓理事から総括コメントが述べられ、國府華子副学長の閉会のあいさつで締めくくられました。

教職学協働プロジェクトは大学構成員一人一人が心地よく過ごせる大学づくりに向けて考え、行動するはじめの一步と考えています。今年度の取組を通して得た気付きを活かし、更なる前進を目指していきます。



閉会のあいさつを行う國府華子副学長



報告会のチラシ

【①社会参画テーマ、②意見表明テーマ】

A グループ：

- ①「聴覚障害学生等の授業支援の改善」
- ②「教員養成課程と教育支援専門職養成課程のすれ違いの解消」

B グループ：

- ①「DXを取り入れた空き教室の可視化」
- ②「学生の大学への帰属意識を高める」

C グループ：

- ①「ラーニングコモンズのルールの明確化・掲示・マップの作成」
- ②「ラーニングコモンズの名称と管理体制について」

ファクトブック 2024 の作成

IR室において毎年度発行しているファクトブックの2024年度版を発行しました。

ファクトブックは、「見える化」した教員就職実績など本学に関する様々な情報を公開することにより、本学の現状について理解してもらうとともに、他大学の状況と比較することで、本学の強みや課題を学内構成員に認識してもらうことを目的として作成しています。

IR室では、本学における取組の成果検証などに資するよう、継続して必要なデータの収集を行っています。



ファクトブック 2024

2023年度に開催した全学FD・SD研修会で学生からの辛辣な要望等を聴き、2024年7月3日に全学FD・SD研修会を開催しました。ワーキンググループへの参加を募集したところ、私の想定を超えた36人の学生・教職員の応募がありました。それぞれ学業や業務がある中、時間を作り出し、深い提案をしていただいたことに感謝しています。学修者本位の大学づくりに向けて、このような活動を大きく育てていきたいと思っています。



国公立大学と連携協定を締結して、教職大学院を核としたネットワークを構築します。

国公立大学と連携協定を締結して、教職大学院を核としたネットワークを構築します。

第3回連携協定校ネットワークフォーラムを開催

2025年2月19日(水)、第3回連携協定校ネットワークフォーラム「連携協定校による教職の魅力共創」を本学で開催しました。連携協定校の大学関係者、本学教職大学院生、本学教職員あわせて31人が参加しました。

会に先立ち、本学学長、「未来共創プラン」担当副学長・学長補佐と連携協定校の大学関係者との間で、2025年度に開催予定の「こどもまんなかシンポジウム」を連携協定校と協働して開催することについて意見交換を行いました。

フォーラムでは、はじめに野田敦敬学長から開会のあいさつが述べられた後、第1部において、本学や連携協定校、他大学出身の教職大学院生5名から「大学院における学びと自己の成長」について、教職大学院での学びの成果や今後の展望等の発表がありました。



あいさつをする野田敦敬学長



グループディスカッションの様子



ディスカッションした内容を発表



教職大学院生による発表

第II部では、参加者はグループに分かれ、「こどもまんなかシンポジウム」についてグループディスカッションを行いました。「どんな先生が魅力的か、どんな学校だったら通いやすいか、子どもたちの声を周囲の大人が共有する必要がある」、「運営方法の提案として、第I部のこどもまんなかシンポジウムと第II部の学生・院生の企画をつなげて、最初から最後の振り返りまで同じグループで活動したほうが、一体感やつながりが生まれてよいと思った」などの意見が挙げられ、最後に野田学長からの閉会のあいさつで本フォーラムを締めくくりました。

フォーラム終了後のアンケートでは、「愛教大から進学した院生と連携協定校等から進学した院生の発表を通して、両者にとって共通の学びのプロセス、それぞれに固有の学びの質の違いがあることがわかった」、「教職大学院を通してできるつながりやイベント等をもっと外に出して魅力を伝えられるようにしたい」などの感想が寄せられました。



フォーラムのチラシ

連携協定大学である岡崎女子大学に卒業生である大学院生と事務職員が訪問

6月13日（木）、連携協定大学である岡崎女子大学に、同大学の卒業生であり現在本学教職大学院で学ぶ大学院生と教職大学院の事務を担当する職員とで訪問し、子ども教育学部1～4年生の学生に向けて、教職大学院での学びについてお話しする機会をいただきました。これは、同大学からご提案いただき実現したもので、本学にとって初の試みでした。

卒業生である大学院生からは、自身のこれまでの教職大学院での学びを振り返る形で、教職大学院での学びの魅力、自身の展望、教員採用試験の対策などについて発表し、教職を志す後輩たちに教職大学院という学びの選択肢もあることについて紹介しました。



教職大学院を紹介する大学院生

教職大学院の事務を担当する職員からは、教職大学院で学ぶことの制度的なメリット、本学教職大学院の特徴についてお話ししました。



制度等の説明をする事務職員

参加した同大学の学生の皆さんは、熱心に耳を傾けてくださり、発表後には先輩である大学院生に質問するなど、よい交流の機会ともなった様子でした。

同大学の先生からは、「卒業生が愛教大の教職大学院で充実した学びができていることについて具体的に話を聞くことができ、とても良い機会でした。学生も実感がもてたと思います」とのお言葉を頂きました。

これからも連携協定大学と協力して、他大学でも同様の企画を通じて交流ができればと考えています。

金城学院大学と教員養成の高度化に関する連携協定を締結

12月19日（木）、金城学院大学と教員養成の高度化に関する連携協定を締結しました。

この協定の目的は、「本学大学院への受験・入学を希望し金城学院大学に在籍する教員を志す学生を対象として、本学大学院教育学研究科専門職学位課程（教職大学院）において、教育実践力を備えた高度専門職業人としての教員の養成を行うこと」です。今までに同様の協定を相山女学園大学、愛知東邦大学、鈴鹿大学、愛知淑徳大学、愛知大学、岡崎



署名する金城学院大学の小室尚子学長（左）本学の野田敦敬学長（右）

女子大学、南山大学、中京大学、東海学園大学、中部学院大学、岐阜協立大学と締結しており、金城学院大学は12大学目の協定締結校となります。



両学長による記念撮影



2024年度は金城学院大学と連携協定を締結し、協定校は12大学となりました。この教員養成の高度化に関する連携協定は、それぞれの大学の教職課程で教員免許状を取得し、さらに高度化を図るために本学の教職大学院に進学を狙うものです。2025年度は教職大学院入学者が改組後初めて7割を超える見込みとなり、その成果が表れてきています。それぞれの大学で学んだことを交流し合いながら学ぶことで質の高い教員を輩出していきます。





あとがき

本報告書は、2024年度の「未来共創プラン」の取組について、巻頭に特集ページを掲載するとともに、1～9の戦略ごとに主な内容をまとめたものです。4年目を迎える同プランは、学内外の多くのみなさまからご支援とご協力を賜り、一つ一つ着実に推進することができました。関係者一同、心より感謝申し上げます。

「未来共創プラン」で掲げる「共創」とは、「人と人が文脈を共有し、相互交流し、助け合いを学び、共に成長していく関係を構築することを通じて、意味を創出し、価値を生み出す」ことを意味します。「共創」するためには、「場」を形成することが重要です。

2024年度の「未来共創プラン」は、戦略8において、学生・大学院生・教職員が協働して課題解決に挑む、「教職学協働プロジェクト」を発足させました。プロジェクトに参加する希望者を募り、社会参画と意見表明の2つのテーマを軸に、3つのグループに分かれて、課題設定をし、試行錯誤しながら課題解決に挑戦しました。

「教職学協働プロジェクト」を発足させた背景には、供給者本位から学修者本位へと大学教育を転換させる必要性ととともに、未来の教育を共に創るという「未来共創プラン」の理念があります。2025年度は、同プロジェクトを一層推進させると共に、広域拠点型教員養成系大学としての意義と価値を高める取組を強化したいと考えています。2025年度、重点的に取り組む内容を以下に3点あげたいと思います。

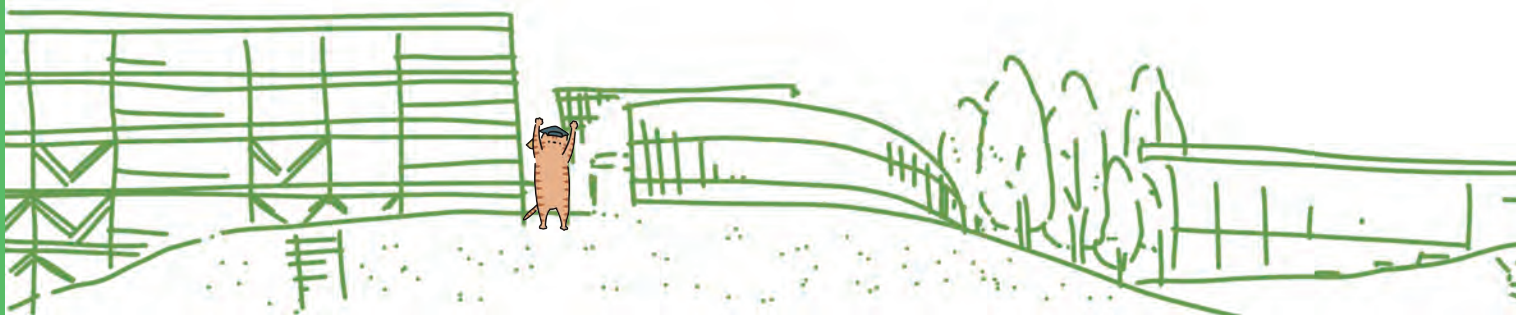
第1は、戦略9に関連して、「教員養成の高度化に関する連携協定」を締結した私立大学の協定校と連携し、戦略3のテーマである「よりよい教育の未来につながる教職と支援職の魅力と共に創り出し、発信する」ことに取り組みます。具体的には、2025年12月13日（土）に、「こどもまんなかシンポジウムーこどもと共に創る教職と支援職の魅力とは？ー」を開催します。これは、戦略8の「教職学協働プロジェクト」で課題にあげられた「教員養成課程と教育支援専門職養成課程のすれ違いの解消」に向けての取組でもあります。同シンポジウムに参加する学生・大学院生を募集し、小学生、中学生、高校生と共に語り合い、学び合う企画を考えます。この取組は、学修者本位の大学教育を実現することにもつながります。

第2は、教育課程の内部質保証体制を構築し、機能強化を図るために、戦略8において、「IRプロジェクト」を発足させます。同プロジェクトの活動は、本学の第4期中期計画（No.8）指標8-3「教職課程の適正な運営のための意思決定ループ」を機能させるために、学修状況やキャリア支援に関わるデータを分析し、教育改善の判断材料を提供することを目的としています。さらに、同プロジェクトを発足させる背景には、令和7年2月21日に中央教育審議会から出された「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）（中教審第255号）」があります。この答申では、これまでの「認証評価制度」を見直し、在学中の学生の成長具合など、教育の質を測る指標を作って、複数段階で評価することにより、受験生が教育内容を比較して、進学先を選べるようにすることで、大学間の切磋琢磨を促し、大学教育全体の質向上につなげることをねらいとしています。新たな認証評価制度が実施されることを見通して、評価システムの機能強化を図り、そのための組織作りを行う必要があります。これは、今後、本学が国公立大学と連携して、中部圏の広域拠点型教員養成系大学として、質の高い教員と支援職を養成する上で、欠かすことができない改革です。

第3は、附属学校園と教職大学院との連携を強化し、教育の実践的研究拠点を構築するために、戦略5で新たに、附属学校園の教員と大学教員と教職大学院生による「実践的研究プロジェクト」を組織し、三者の連携による実践的研究を積み上げ、研究の成果を学会発表や学会誌等への投稿につなげる取組を行います。この背景には、中央教育審議会 初等中等教育分科会 教員養成部会において、教職課程及び教員免許状の質保証をめぐる問題について、教職大学院における教育臨床研究（教育実践研究）の充実が議論されています。大学院生は、学びの高度専門職として、子どもたちの学びを支援・伴走しつつ、教育実践を省察し、客観的な事実を基によりよい授業を開発する力を身につけることが求められます。今後益々、本学が中部圏の広域拠点型教員養成系大学としての意義と価値を高めるために、実践的研究拠点を構築することに尽力します。

これからも、よりよい教育の未来を共創する場づくりを通して、学内外に共感の輪を広げていきたいと思っています。

真島 聖子（未来共創プラン担当学長補佐）





『愛知教育大学未来共創プラン 2024』

監修

野田 敦敬（愛知教育大学 学長）
 小塚 良孝（愛知教育大学 副学長 カリキュラム改革・国際交流・未来共創担当）
 真島 聖子（愛知教育大学 学長補佐 未来共創プラン担当）

担当課

企画課 未来共創推進室	戦略 1
学術研究支援課	戦略 2、戦略 3
国際企画課	戦略 4
附属学校課	戦略 5、戦略 6
教務企画課	戦略 7、戦略 9
企画課	戦略 8

デザイン

企画課 未来共創推進室

愛知教育大学
未来共創プラン
2024

2025 年 3 月 31 日 発行
 監修 野田敦敬・小塚良孝・真島聖子
 発行 国立大学法人愛知教育大学

印刷

ツゲ印刷株式会社

子どもキャンパスプロジェクト
 使途限定基金寄附者ご芳名

河合 晃輝 様



ご支援を賜り誠にありがとうございました。

未来の教育を共に創る

愛知教育大学が目指す姿

○子どもの声が聞こえるキャンパス

○地域から頼られる大学

未来共創プランのHPに
ぜひ遊びに来てください。



愛知教育大学の
YouTube チャンネルに
未来共創プランの動画も
たくさんありますよ。



国立大学法人
愛知教育大学
AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

〒448-8542
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
<https://www.aichi-edu.ac.jp/>